勢い余ってブチ抜き5P!!

キャプテンストライダム大特集!!

『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』
発売記念特大号

宇都宮から世界へ！
シュールな3人が贈る、
エンタテインメントロックの
真骨頂

夢に破れるひとのカケラが
ヤマのように見えたら要注意！

【目次】

インタビュー：キャプテンストライダム
ディスコグラフィー：キャプテンストライダム
ノンストップ雑談：永友（キャプテンストライダム Vo./G.）
梅田（キャプテンストライダム Ba.）
菊住（キャプテンストライダム Dr.）
ライブレポート：キャプテンストライダム
付録：キャプテンストライダム専門用語辞典

インタビュー

キャプテンストライダム人

キャプテンストライダム…“あの松本隆が立ち上げたレーベル【風待レコード】からデビューしたバンド”…という冠が、いい意味でまったく似合わない。頭が狂っているのか、まったく何も考えていないのか、単に人見知りで奥手でネクラでオタクでキチガ…い、いや。彼らを普通のギターロックバンドだと思うのは大きな間違いだ。彼らは今後、枯渇したシーンにきっと大きなムーヴメントを起こす！と思う。ハズ。多分。ってケンちゃんちのおばあちゃんが言ってた。

●『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』ですけど、作品としては久しぶりじゃないですか。
永友聖也（Vo. / G.）：去年の11月に出た『ブッコロリー』以来ですね。ひたすらライブをやってましたね。
●特に印象に残ってることってありました？
永友：5月に3人揃って東京に引っ越しました。
●生活の場は変わったわけですけど、バンドとしての一番大きな変化はなんなんでしょう。
永友：アルバムを作って、出てって、宇都宮時代とかは好きなように作って垂れ流してたんですけど、自分の曲に責任を感じるように…。
●そんなん考えるようになったんですか!?
永友：ものすごく考えますね。
●…え、その結果がコレ？（『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』）
永友：（笑）。僕なりの責任感の表れですね。
●今までやる気は無かったんですか？
永友：やる気はあったんですけど、『ブッコロリー』（03.11.26 1st ALBUM ）を作っていく中で、自分の曲に対する目線が、“自分で自分のバンドのファンになった”みたいなところがあったんですね。いろんなことをやっていこうっていう。
●なるほど、責任感を持つようになったと。「どうでもいい」っていうのを無くす、妥協を無くす、みたいな。
永友：おふざけっぽい要素が入ったりっていうことに対しても責任を持ってやっていこうって。
●責任をもってシュールなことをやると。
永友：責任を持って無責任なことをやっていこうかと（笑）。
梅田啓介（Ba.）：でも、面白そうだなっていうアイデアがあったら、まずはやってみてどうかっていう。
●それは自分たちの発する音楽に関わる人たちの数や顔が見えてくることによってですかね。
永友：あと、『ブッコロリー』に対するいろんなアンケートを読んだりとか、直接「この曲の歌詞のこの部分が良かったです」とか言われたりすると、時として「歌詞のこの部分なんて適当に作ったのにな」みたいなこともあったり（笑）。でも、そういうところを受け取ってくれる人がいるんだっていうのを肌で感じたんですよね。
●自分があまり気に留めずに発信したものに食いついてきちゃったりとか。
永友：だからってストイックになったりということではないんですけど、そういう風に受け取ってくれる人がいるんだっていうことはすごく把握しました。
●因みに『ブッコロリー』の反応はどうでした？
永友：まず「面白い」って言ってくれる人が多くて。特に歌詞が面白いって。
●おかしいっすよね。
永友：…ってことを結構言われましたね（笑）。
●誰でも思うことですよ（笑）。
永友：（笑）。それが意外と自分では見えてなかったり。
●歌詞は普通に書いてるんでしょ？
永友：まあ「マウンテン・ア・ゴーゴー」とかは自分でもちょっと面白がって書いてた部分があるんですけど、「肉屋の娘」とかはいたって真剣に。でも聴いた人の感想を聞いて、客観的に自分の作品を見ることもできて。
●「もっと変な人だと思ってた」とか「意外と普通なんですね」とか言われないですか？
永友：言われますよ。ものすごく。「もっとキテレツな人かと思ってました」みたいな。
●初対面の人はみんなそう言うでしょうね。でも奥底に隠してるんじゃないですか？
永友：どうですかね。もっとテンション高いと思われてるっていうところはありますね。作品のイメージで。
●ウッチャンナンチャンのウッチャンとか、ナインティナインの岡村さんが実は普段ものすごくおとなしい人、みたいな。
永友：ああいう人はちょっとシンパシー感じたりとか…。
●感じますか（笑）。
永友：本宮ひろ志の漫画にもありましたね。『硬派銀次郎』の台詞かなんかで。「男は普段灰色でも何でもいいんだ。いざというときに黄金色に輝きさえすれば」みたいな（笑）。そういうのがいいなって。
●なるほど。この1年間はライブを続けつつ、曲とかも書いたりとか。
永友：書いてます。あんまり出来てないんですけど。形になってるのは、まだそれほど。
●え？ 作ってない？
永友：いや、作ってはいるんですけど、詰め切れてない曲が沢山出来てるような状態なんですけど。まあ『ブッコロリー』はあの当時でのベスト盤というか、あの時点でやれることとは全部出してしまおうという感じだったんで、それよりいいものを作ろうということで、煮詰まったりした時期もあったんですけど。妙にシリアスになってしまったというか、出てくる曲が普通になってしまって。
●「何だよ、普通のギターロックじゃん」「ひねくれてねえじゃん」みたいな。
永友：まあ結果的に。
●それはどうしてなんですか？
永友：たぶん責任を持とうみたいなことを考えすぎたというか。もともと真面目なほうなんで。
●…は？
永友：ホントに（笑）。なので、視野が狭くなってしまった。
●でもそれは解消されたわけですよね。
永友：今回のアルバム2曲目に入ってる「ノーテンフラワー」とかは、そういう時期を経て…。
●出来たんですか。のびのび感を出そうとした？
永友：まあ、なんか…正直最初は適当に作ったんですけど（笑）。
●考えすぎると変にまとまってしまう？
永友：ああー、そうですね。そういう時期があったからこそ出来たっていうのはたぶんあるんですけど。いろんな曲を自分の中でボツにしていって、適当に作ったら出来たのが「ノーテンフラワー」だったんですよね。5月ぐらいに作ったんですけど。東京に出てくる直前に。
●宇都宮最後の曲。宇都宮に捧げる曲？
永友：生まれ故郷の宮崎に捧げる曲ですね。僕の小学生時代の想い出を。
●全然想い出らしい歌詞、ないですよ。
永友：いや、これが実はふんだんに含まれてるんですよね。同級生のナオコちゃんって女の子がいて。パット工場の娘なんですけど、僕はナオコちゃんのことが好きだったんですよ。小学校1年とか2年ぐらいの時に毎日僕と一緒に下校してくれて。その学校を出てからナオコちゃんの家に着くまでの帰り道の感じを、ものすごく細かく覚えてたんです。まず左手に養鶏場があって、ずーっと坂があって…その時の感覚みたいなものも意外とリアルに残ってたんですよね。その時の気持ちを思いだして書いたんです。
●よく覚えてますね。ナオコちゃんのことは今でも好きなんですか？
永友：…その後転校したんですよ。
●あら！ ドラマティック。
永友：3年生の時に転校して、4年生で戻ってきたんですよ。
●なんじゃそりゃ（笑）。パット工場夜逃げ？
永友：今思えば…（笑）。ナオコちゃんとは中学校も同じだったんですけど、卒業するときにプレゼント交換をして。僕は当時オタクだったんで…。
●“当時”じゃないでしょ？
永友：今はもう足洗ってますよ。当時はもう目も当てられない状態だったんで（笑）。自分で編集したウルトラマンの主題歌のベスト盤みたいなテープを渡したら喜んで受け取ってくれて。多分シャレのわかる子だと…。
●…ナオコちゃんが大人なだけじゃないんですか？（笑）
永友：自分で書いた歌詞カードとか。気持ち悪いんですよ、今思えば。しかも主題歌じゃなくてウルトラセブンの挿入歌。カッコイイ曲があったんですよ。
●…キモイですね。
永友：今、自分で言ててちょっと気持ち悪かった（笑）。
●この1年間で、何か想い出に残る事件はあったんですか？
菊住守代司（Dr.）：ゲームセンターに「ドラムマニア」っていうゲームがあって、それに「マウンテン・ア・ゴー・ゴー」が入ってるんですよ。で、ツアーで大阪に行ったときに、「じゃあみんなでやりに行こう」ってことになって、僕がちょっと見せてやろうじゃないかと。
●「ワシの曲や」と（笑）。「ワシが考えたんや、このドラム」みたいな。
菊住：そうです（笑）。上級者モードでやったらテンパって、イントロでゲーム・オーバー（笑）。
●ダ、ダメじゃないですか（笑）。それって、カラオケで自分の曲唄ったら点数悪かったのと同じパターンですよ。
菊住：そのとき後ろで見てた常連客が、僕らが終わった後でおもむろに「マウンテン・ア・ゴーゴー」を選択して、しかもめちゃくちゃ上手かったんですよ（笑）。
梅田：あれはこれ見よがしだったよね。
永友：しかもライブの前日だったんですよ。死活問題（笑）。
●身も蓋もない（笑）。それは大事件ですよ。
菊住：カッコ悪かったですね。
●（笑）。そんなことがありながらもバンドとしてはすくすくと成長をしていき、11/3にアニメ番組「NARUTO」のエンディングテーマになっている『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』が出るんですが…“ツー”って！
永友：番組スタッフの方が、「マウンテン・ア・ゴーゴー」をテーマ曲に使いたいって言ってくれたんですよ。ただやっぱり歌詞が“ランス”とか“ホームラン”とか、“カーブ・ファン”とか、いくらなんでもアニメ・ソングには相応しくないし、「NARUTO」は忍者アニメでもあるし（笑）。「いろいろややこしいんで、違う風にできないですか？」って話を頂いたんですね。それで最初はもう、「イヤです」って。でも「やっぱりこの曲を使いたいんだ」って、もう1回言ってくれたんですね。そこまで言ってくれるんだったらと考え直して、こういうチャンスもなかなか無いと思って。というのは、1回完成した曲をもう1回見直したりとか、ましてやバージョンアップして世に問うってことは、ひょっとしたらもう2度と無いことかもしれないし、この時期に自分の作品を見つめ直しておくのは意味があるかもしれないと思って、チャレンジしようって決めたんですよ。そうやって改めて曲と向き合う時間を取ってみて、まず曲の本質って何だろうってことをすごく考えたんです。
●そんなこと考えたんですか。結局、「マウンテン・ア・ゴーゴー」の本質はなんだったんですか？
永友：見れば見るほどわからなくなったんですけど（笑）。“ランスがホームラン”、“カーブ・ファン”って何だろうって。まあとにかく、歌詞とリズムとメロディが一体になったときのパワーが第一にあって、サビに入ったときのリズムの面白さだとか気持ちよさみたいなものはまず絶対に必要だと思ったんですよね。後はもっと突っ込んだ所で、この歌詞は何を言わんとしてるのかみたいなことを改めて考えると、最初の出だしのところでネガティブな風景の描写がありながら、サビの部分で何事もなかったかのようにホームランを打っちゃうっていう。その風景の切り替えなんだなって思ったんですよね。ネガティブなことだったり喪失感を、だから頑張っていこうとか変えていこうっていうんじゃなくて、それをひっくるめた上で最後にお祭り騒ぎするっていう、それが本質なのかなって。で、前回はホームランがあったんですけど、今回は“ダンランダンスでランデブー”って。それまでのネガティブもポジティブも棚に上げて、いきなり踊っちゃうっていう。
●僕はランスっていうチョイスがすごく好きなんですよ。あの時代のカーブでは普通だったら山本とか衣笠なんでしょうけど、ランスって…。
永友：2割5分も打ってないですよ。2割1分8厘とか。
●でもホームランは確か30本ぐらい？
永友：最低打率ホームラン王の記録を持ってます。
●そのバカさ加減がいいですよね（笑）。
永友：まさに、ホームランか三振かっていうのを地でいってて、ヒットを80本ぐらいしか打ってないんですよ（笑）。でもそのうち30本ホームラン。その辺はやっぱり、当時見ててもポップでしたね。
●そしてリリース後には主要都市を回るツアーが始まるわけですが、楽しみですか？
梅田：楽しみですね。本数の多いツアーは初めてなので。
●ちなみにキャプテンストライダムにとってのライブっていうのはどういうものですか？
永友：最近インタビューとかで「バンド結成するときにどうやってメンバー選んだんですか？」って訊かれることがあって思い出したんですけど、「ドラムを選ぶときは叩いてる時の顔が面白い」っていうので選んでたんですよ。
●確かに。ずっと笑っとる（笑）。
永友：同じぐらいのレベルにいるドラマーの中で、一番顔が面白いドラマーを。だから、ライブは顔とかも含めて“笑える”ってことがすごく重要だなと思ったんですよね。そこは結成当時からこだわってましたね。
●ビジュアルイメージにはこだわってたんですね。
永友：こだわってました（笑）。やっぱりイメージに合わないものはどんどん排除していくっていう（笑）。とにかく笑えるっていうのにすごく憧れがあったっていうのを思い出して。昔のザ・フーとかツェッペリンとか観ると相当笑えるんですよね。「この顔は無いよ～」とか笑いながら、それがどういうわけか最終的に感動に結びつくっていう、そういうことができたらいいなと思って。それは別にギャグとかではなくて、そういう感覚を出していけたらと思いますね。
●なるほど。じゃあそういう目標とするライブに対して今一番の課題ってどういうものですか？
永友：…顔ですかね（笑）。
梅田：せっかく作った音を楽しむための、お互いの表現力みたいなものを鍛えていけばもっといいものになると思う。
●ひとつの動作だけでも様になってるというか、カッコイイとかじゃなくて印象に残るみたいな。そういうことなんでしょうね。
永友：あと、音楽をやってる背景にあるバックボーンみたいなものだと思うんでしょうね。流行りの言葉で言えば“人間力”みたいな。
●その言葉、流行ってます？（笑）
永友：流行ってないかな？（笑） アンガス・ヤングとかを観てても、単なる動きとかよりも、その背景にある生き様が垣間見えるというか、そういうのがライブで出ると思うんですよね。あとは3人の演奏的な噛み合わせというよりは…。
●呼吸？
永友：まあ恥ずかしい言葉で言えば…絆？
●あ、言っちゃった（笑）。
永友：でもそういうところだと思うんですよね。
●3人の絆ってどういうもんですか？ お互い信頼してる？ メンバーのこと好きですか？
永友：好き…とか、こんなところで言えないじゃないですか（笑）。でもリハーサルをしててもシビアになってきてますね。昔はほったらかしにしてた部分もあるんですけど、もっと突っ込んだところまで言える関係になってます。「ちょっと怒るかな？」みたいな遠慮が無くなってきました。
●「こいつが良くなったら俺も良くなる」ていうか「もう大好き！」みたいな（笑）。
永友：（笑）。それは言わせないでください。シャイなので。

シャイなキャプストの特集はまだまだ続くよ→

DISCOGRAPHY

2002.2.3 『ノーテンフラワー』インディー盤
僕が4年ぐらい勤めてた会社を辞めて1週間後ぐらいに録ったので、ものすごい集中力を出してたのは覚えてますね。会社を辞めて何をするんだろうっていうことをそれまでは真剣に考えずにいたので、実際に会社を辞めて、いざ音源を作ろうと思って最初に録ったものなんで、思い入れが深いですね。ジャケットも黒・白・虹色の3種類あって、意見が分かれたんで3つとも出そうってことになったんです。この作品で風待レコードのオーディションに応募して、シングルがリリースされるきっかけになったので、自分の中ではすごく好きなんですよ。全部自分たちで作ったし、想い出がいっぱい付いてきてる分だけ相当美化されてしまうんですけど。そのことを考えたら涙ぐみ…はしないですけど、とにかく好きなんですよ。（永友）

2003.9.25 『マウンテン・ア・ゴーゴー』シングル
レコーディングの前々日に車を運転してたら後ろから原チャリに思いっきりぶつけられて、ムチウチになってしまって。次の日痺れてたんで病院に行って、「ドラム叩いてもいいですか？」って訊いたら、「イヤイヤイヤ」って言われて（笑）。ひょっとしたら代役を立てるハメになりそうだったんですけど、デビュー曲に参加できないのはマズいなってことで、首にコルセットを巻いて、そのままやっちゃいましたね。支障が出たというよりは、むしろ必死になって逆に良かったかも。もしかしたらその時養成ギプスを巻いてたから、今ドラムマニアで叩けないぐらいのいい音が出せたのかも（笑）。確かにやりにくかったのは覚えてますね。その時の怨念みたいなものが今の音源には入ってると思います。（菊住）

インタビューこぼれ話（その1）
取材時、梅田くんはアーティスト写真に写っているリュックサックを持参。読者プレゼント用ポラロイド撮影の際、わざわざ担いで頂きました。

DISCOGRAPHY

2003.11.26 アルバム『ブッコロリー』
ファースト・アルバムは一生で1回しか作れないですから、完璧なものを作ろうというよりは、出来ることを全部やりつつ、出来ないことにもチャレンジするっていう。それまでは全部自分でアレンジしてやってたんですけど、みんなでいろんな意見を出してやっていく方が面白いっていう風にすごく意識が変わってきて。それまではアレンジに過剰な自信があったんですけど、自分で思ってる世界の100は自分の中の100でしかないし、それ以上でも以下でもないんですけど、レコーディングにはまたいろんな可能性の試し方があるってことに気づいたんですよ。それが後の崎陽軒のCMに出演することにも繋がってると思うんですけど。アルバムを作る前と後では作品を作る視点が変わりましたね。（永友）

次に出す（であろう）アルバムについて
もう1回1回、その時のベスト盤を作っていくしかないと思ってますけどね。やっぱりドキュメンタリーじゃないですか。ファースト・アルバムとかは特に、おぼつかない部分とかいびつな部分が入ってるけど、経験を積んでいくと同じ様ないびつさは作れないし、そこがいいと思うんですよ。セカンドはそれよりも成長しつつ、その時のバンドの状態が素直に出せればいいと思いますけど。（永友）

インタビューこぼれ話（その2）
インタビュー中に出来上がったばかりの『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』のPVを観せて頂きました。「何度も観たくなるんですよ」（永友）、「UFOとか飛んでたのわかりました？」（梅田）と彼らが言うように、非常に訳がわからなくて（いい意味で）面白い作品に仕上がっています。必見です。

しゃべりだしたら止まらない 狂った歯車はもう戻らない キャプスト・ノンストップ雑談

2時間を越す取材を終え一言「温泉の事、しゃべり足りません」 Vo./G. 永友聖也

東京に出てきて唯一困ったのが、**温泉**が無いことなんですよね。お肌の調子が（笑）。宇都宮にいたときは車で30分ぐらいのところに温泉があったので、最低でも**週に1回**は行ってました。東京にも銭湯はあるんですけど、天然の温泉はなかなか無いので。乾燥肌だったり、切り傷は温泉で治ってたんですよ。好みでいうと**アルカリ泉**が好きですね。ただひとつ参考を言うと、**ぬるめの温泉**はいい温泉が多いんですよ。だいたいの温泉は、最近も話題になってますけど、薄めたり沸かしたりしてるんですよね。**粉入れたり（笑）**。つまり、ぬるい温泉は涌かしてない可能性が高いんですよね。ちゃんとしたところはその日の湯温によって温度が変わったりとか、お湯の温度で**見極められる**んです。それはもう経験しないと。今まで行った中で一番のオススメは、福島の二岐渓谷ってところにある**湯小屋旅館**です。岩風呂があって、目の前を川が流れてて、浴槽が全部で3つあるんです。お湯の質といいロケーションといい、**完璧に近い**。透明で、ちょっとサラッとしたお湯で。もともと経営していた人が倒れて、もう畳もうとしてたらしいんですけど、常連だったサラリーマン4人の方が、「こんないいお湯を埋もれさせるのはもったいないから」ってことで、他に仕事をやりながら、日替わりでいろんな人が管理人をして運営してるっていう。**体だけじゃなくて心も温まる**（笑）。つげ義春の漫画のモデルにもなったんですよ。

バンド界きってのグルメ・ベーシスト。懲りようがハンパねぇ！ Ba. 梅田啓介

ラーメンにすごく思い入れがあったんですけど、宇都宮から引っ越してきて、ラーメンを食べなくなっちゃって。東京のラーメンは**おいしくない**ですね。だからそば派になりました。しばらくは東京の**そば屋でバイト**してたんですよ。そばにもいろいろあって、打ちたてがいいとも限らないとか。個人的に山芋と卵をつなぎに使った「卵切り」が好きだとか。太い手打ちの田舎そばと細いそばの**食べ比べ**をさせられたりして。昨日打ったそばと、今日打ったそばと、一週間前に打って冷凍したそばを比べてどれだか当てるとか。打ちたてのそばが一番**香り**が強くて上手いんだけど、意外と古いそばとかも、噛んで味わってるうちに**甘み**が濃く出てきたりして、それなりの良さがあって。でもつゆをつけると味がほとんどわからなくなってしまうので、**江戸前の落語**じゃないけど、**通の人**は麺の先だけをつけてほとんどつけないっていう。そばも好きなんですけど、そば屋を好きになったのって、そばそのものというよりも**そばつゆ**が好きなこともあって。だからそば自体は下手すると更科とかの白いそばでも別にいいんですけど。そばつゆが美味い店は、親子丼とかカレー南蛮とか、そういう店のメニューは全部そばつゆを使ってるので、**信頼できます**ね。そんなわけで、最近は1人で腹減って行くときは絶対にそば屋になってます。いつか自分で打ってみたいですね。配合が正しくても**揉み方**で食感に差が出ますからね。

クーラー好きなら負けないぜ。省エネ？ 俺には関係ないね。 Dr. 菊住守代司

「趣味が無い」というのが僕の課題だったんですよ。見ての通り、他の2人は多趣味で。僕も深くのめり込む趣味が欲しくて、「何かないかな？」って言ったら、「じゃあ映画でも観てみれば？」ってことで、ビデオを借りて観てたんですけど、もう1ヶ月ぐらい経ったら、借りたものを観ずに返したりとか。趣味としてはダメだなと（笑）。あと、最近腰が悪いので、「じゃあ歩くのはどうだ？」と思って**デューク更家**のウォーキングの本を買ってみたんですよ。で、読んでたら**「女性らしく優雅な歩き方をしよう」**とか…。健康のために買ったんですけど、「女性の**美**とは」みたいな（笑）。まあそれも女性の美しさにはかなわずに挫折しまして。「いつからこんなに**つまらない大人**になってしまったんだ」と思って、この前小学校時代の友達に会った時に「最近こうなんだよ」って言ったら、**「いや、お前は昔からそうだった」**って（笑）。ゲームは好きなんですけど、日常生活に支障をきたすんですよね。支障をきたすか、まったく定着しないか、どっちかに振り切るんで。バンドも、もともとは大学生活を楽しもうと思って始めたんですけど、ちょっと振り切りすぎて**大学生活に支障をきたして**しまいまして（笑）。ほどよいポジションを見つけるのが苦手なんですよね。唯一今でも好きなものといえば**クーラー**ぐらいで。強ければ強いほど好きです。あの人工的な冷房な感じ、外とちょっと違うのが好きなんです。

番外編：永友聖也が語る ～3人は“オタク”なのか？～

僕はオタクではないです。僕は片足突っ込んでたからわかるんですけど、本当のオタクはこんなもんじゃない。“オタク”って言ったらオタクに失礼ですよ。本物のオタクはもっと自分に厳しい。自分に厳しく他人にもっと厳しいのがオタクの特徴ですね。オタクがああいう格好をしてるのは、「ファッションにかける金があったらレーザーディスクを買え！」ってことなんですよね。バンダナとかも、髪をまとめたり切ったりする金がないんですよ。金と時間を、ビデオ観たり、DVD買ったり、コミケ行ったりすることに充てるために、とにかく髪を適当に、合理的にまとめる手段としてバンダナが一番適してたわけです。バンダナの機能性のみにしか注目してないですから。指の先が開いてる革の手袋してる人とかいますけど、あれはたぶん小学生時代から使ってた（笑）。とにかく物持ちがいいんです、オタクは。

LIVE REPORT
シュールでポップでブッコロリー！ キャプストのライブには華があるのだ！

「ツアー'04 夏～線香花火大会～」2004/9/30@渋谷O-West

彼らの表情からは緊張の色も見えるし、気のせいか遠足に出掛ける小学生が発する匂いも感じられる。“電線の上に乗っかって～メシを食うのさ！”というキテレツな歌詞とキャッチーなメロウがダンサブルする「影の無い男」からキャプストのステージは幕を開けた。そして曲を重ねる毎に3人のエンジンは回転速度を上げていく。アッパーな「ノーテンフラワー」やグルーヴが弾ける「肉屋の娘」では、永友が決して憧れのあの子には見せられないような形相で左足を常時30cmほど宙に浮かし、梅田が左斜め上やや前方にベースのネックを掲げまるでグラスの中で揺れる琥珀色のブランデーを眺めるように客席を見つめ、菊住はなぜかずっと笑っている（笑）。かと思えば「サンドバッグの夜」で愛を囁いてみたり、「マウンテン・ア・ゴーゴー」でランスがホームランを打ってみたり…要するに、訳がわからなくて小憎たらしく、ロックがぶっ飛んでいるのがキャプストなのだ。理解しなくてもいい、感じるのだ！

Encyclopedia キャプテンストライダム 専門用語辞典

音楽を起点に訳のわからないあらゆる方向にベクトルを投げっ放しているキャプテンストライダム。彼らをちゃんと理解するためには、このキャプスト専門用語辞典が必須アイテムとなるのだ！

あ **あばれんぼうきゃぷてん [暴れん坊・キャプテン]**（名詞）
雑誌やテレビなどでコメントを求められた際、素のまま喋るのが恥ずかしかったメンバーが考案した架空のキャラクター。悪代官（梅田）と商人（菊住）が悪巧みをしているところに暴れん坊キャプテン（永友）が現れ成敗するという時代劇風のストーリーになっている。「グラムロックの人がお化粧する感覚に近い」（永友）

お **おばけないたー [おばけ・ナイター]**（名詞）
キャプテンストライダムが宇都宮時代から行っている自主企画のイベント名。メンバーが「いいな」「負けたくない」と思うバンドを呼んで試合をするというコンセプトで、タイトルは人間チームと妖怪チームが野球で対決するという「ゲゲゲの鬼太郎」のエピソードから。「妖怪チームが勝ったら人間の命をもらう」という条件付きの試合だったが、結末は夜明けがやってきて妖怪が消えてしまいドローになってしまう。「鬼太郎も人間を殺す気満々なんですよ」（永友）

お **おんせん [温泉]**（名詞）
小学校時代から温泉好きだった永友が、3年ほど前に「劇的に素晴らしい温泉体験」をした際に一気に覚醒。それまではロケーションにこだわっていたが、覚醒したNEW永友は質にこだわるようになる。ちなみに銭湯でもマイナス・イオンによるリラックス効果は得られるが、「温泉とは別物と考えている」（永友）とのこと。どうでもいいけど。

う **うつのみや [宇都宮]**（名詞/地名）
バンドを結成した場所。地元から上京する際、難易度の高い東京の大学に入れなかった菊住は、「関東に県境はない」と思い、名前の響きに惹かれて宇都宮にやってくるが、東京からは意外と遠く、地下鉄も走っていないことにショックを受ける。

く **ぐらっぷらーばき [グラップラー・刃牙]**（名詞）
「週刊少年チャンピオン」で連載中。童貞を捨てた瞬間から最強の戦士になった少年、刃牙が主人公。実際の人間にはない筋肉も、臨場感を出すために描かれている。バンド名に「キャプテン」をつけたかった永友が、作中に登場する名脇役キャプテン・ストライダムから名前を拝借。バンドを始めた当初は「グラップラー刃牙」がメンバー間の唯一の共通言語だった。

き **きようけん [崎陽軒]**（名詞）
横浜にあるシュウマイの老舗店。ライブハウスで演奏している駆け出しのバンドに、「なかなか甘くないけど頑張れよ」と店のマスター（鈴木慶一）がシュウマイを差し出す、というテレビCMの設定に合ったバンドを探していたスタッフの推薦により、キャプテンストライダムのメンバー3人が出演。「ノーテンフラワー」と未発表曲が使用されている。

し **じごくのぼんおどり [地獄の盆踊り]**（名詞）
「マウンテン・ア・ゴーゴー」の入った自主制作盤のタイトル候補として永友が出した案。しかし、他の2人が激しく反対。「盆踊りの裏に隠れている巨大な喪失感を極端に表現した」（永友）言葉で、今でもバンドのコンセプトになっている。「地獄の盆踊り」という曲まで作った永友は、その曲が日の目を見る機会を虎視眈々と狙っている。

せ **せいぶけいさつ [西部・警察]**（名詞）
学生時代午前中にテレビで再放送していた『西部警察』に夢中になっていた梅田が、ある朝ブラウン管から迫ってきた『西部警察』のタイトル・ロゴにインスパイアされ、バンド名候補として挙げるも一蹴。「大門（渡哲也）が犯人を打つときにショットガンを構えた体勢でワゴンの上にせり出してくるんだけど、狙い打ちされて逆に危ないと思う。そこが見所」（梅田）「歌舞伎だね」（永友）

は **はたらくくるま [はたらくくるま]**（名詞）
キャプテンストライダムが初めて制作したデモ盤CDのタイトル曲で、子門真人の曲とは同名異曲。ソニック・ユースを彷彿させるノイジーなグランジ・テイストの楽曲で、歌詞に“はたらくくるま”は一切登場せず。「関係無いことを組み合わせて何か作るのがカッコイイと錯覚していた」（永友）

は **ばけないくん [バケナイくん]**（名詞）
イベント「おばけナイター」のイメージ・キャラクター。メンバーが制作している新聞の下書きをしている際に、なんとなく書いたイラストがもとで誕生（右図参照）。7月15日に開催された「真夏の夜のおばけナイター」で配布された「折り紙セット」を完成させるとバケナイくんになる。

は **はれんち [ハレンチ]**（名詞）
メンバーが大学時代に在籍していた音楽サークルの後輩。新歓の飲み会で悪酔いした学生に向かって「破廉恥、破廉恥だわ！」と連呼していたところ、逆に自分がハレンチと呼ばれるようになり、それ以来自分から進んで「ハレンチです」と名乗るようになる。バンドがはじめてステージで「マウンテン・ア・ゴーゴー」を披露した際にバック・ダンサーとして登場した“スレスレ・ガールズ”の一員でもある。現在はメンバーの推薦により、バンドのスタッフ見習いをしている。

ま **まんが [漫画]**（名詞）
永友は東京に引っ越してきた際、自宅トイレ前にある1畳ほどのデッド・スペースに扇風機と蛍光灯と折り畳みイスを持ち込み、“漫画室”を作るほどの漫画好きで、手塚治虫と水木しげるはほとんどコンプリート。ちなみにメンバーそれぞれのオススメは、永友が「銀の三角」（萩尾望都）と「ワンダー3」（手塚治虫）、梅田が「DEATH NOTE」（小畑健）、菊住が「天」（福本伸行）

み **みーとしょっぷこしみず [ミートショップ・こしみず]**（名詞）
「肉屋の娘」のモデルとなった、栃木県内の店。もともとは肉屋だったが、店先に少しずつ並べていたギターが増え、今では肉とギターとお惣菜が渾然一体となって売られている。「肉屋の娘」は、モモヨさんという84歳のお婆さんで、メンバーが遊びに行くとコロッケを揚げてくれ、ご飯とみそ汁が出てくるらしい。店先に置いた花がなぜか枯れないという都市伝説があり、永友が母の日にプレゼントしたカーネーションが未だに咲いているらしい。バンドがはじめてインストアライブを行った場所でもある。

J **JUNGLE★LIFE [じゃんぐるらいふ]**（名詞）
キャプストの3人に音楽とは関係ないことばかり質問し、時間がかり過ぎたため取材を一時中断。次に入っていた他雑誌の取材が終わるまでレコード会社の食堂でカツカレーとケーキを食べて待っていたスタッフが作るフリーペーパー。
Interview：Takeshi.Yamanaka、Assistant：Yuya.Shimizu

R **Release Information**
NEW MAXI SINGLE
『マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー』
風待レコード/SMAR
AICL-1592
¥1,223(税込)
2004.11.03 Release

WEB：http://www.captain-a-gogo.com/

『ツアー'04 CAPTAIN A GO GO!』 → 11/11 仙台LIVE HOUSE enn → 11/14 大阪十三ファンダンゴ → 11/15 広島ナミキジャンクション → 11/17 福岡ビブレホール → 11/24 名古屋得三 → 12/4 ワンマンLIVE『サンドバッグな夜』下北沢CLUB QUE